

平成 30 年 8 月 28 日～9 月 15 日、令和元年年 6 月 10 日

ホツマツタエ講座

年代の虚像から生じた 5 朔の不知火と紀年問題

(不知火の 5 朔を糺せなかった古代官僚群)

ホツマツタエ研究家 吉田 六雄

まえがき

古代日本には、「暦がなかった」とされ、神武天皇元年は暦が渡来してからの逆算年で作成されたと云われる。そのため、古代日本の起源については論点となっていた。それにも況して、日本書紀、ホツマツタエを見ると多くの暦日が記述されているが、残念なことは天皇らの年齢、在位期間が近隣諸国より飛躍的に長大であることであった。

また、江戸時代の本居宣長は、超年代の解説しようとする者を批判し自らは深く研究した文章を残してない。明治の那珂通世は、自らの研究でシナの周王の年齢に対し我が国の天皇の年齢が 2 倍であったことを知ったが、江戸からの流れを打破できず、古代中国の讖緯説を取り入れた辛酉革命を元に神武元年を紀元前 660 年に据え置いた。このことは、江戸前期の林羅山の子の鷲峰が残した日本王位一覧表に恵王 17 年を神武元年とする記述でわかる。昭和の津田左右吉は暦日を解説せず日本書紀を「物語」と述べた。

私は平成 6 年にホツマツタエに出会い、大半の研究をスス暦、アスス暦に費やしてきたが、前述の説は納得ができてない。その理由は、日本書紀暦、アスス暦が自然科学、生理学より説明できないためである。納得できない代表的な記述としては、

- (1) 景行天皇記の 18 年の条に「天皇自ら筑紫を巡幸された折の 5 月朔（日本書紀）、5 月初日（ホツマツタエ）に不知火が現れた」旨の記述がある。だが、昨今の不知火が現れる日は、旧暦の八朔であり景行天皇記とは 3 ヶ月の相違がある。
- (2) 神武天皇などの年齢などにも現れており、日本書紀の 17 代、ホツマツタエの 12 代の天皇の年齢は 100 歳以上が約 60～70% を占めており人類学上も否定され、特に、戦後は日本の文献古代史も学術的に否定された感がある。

そのため、アスス暦の前身のスス暦を研究すると、アマテル神の頃の 1 日は、16 穂で数えられていた。孫のニニキネの頃になると、2 日で 16 穂を数えたとして、改暦された記述があり、16 穂を基準すると経過日数が 2 倍になっていた。そのため、ニニキネ以降のアマキミ（天君）、オオモノヌシ、オオヤマスミの家系、天皇も現在人と比較すると、2 倍化傾向になっていた。そこで、2 倍化暦の傾向が掴めたため、アスス暦の暦日を太陽暦（本来は太陰太陽暦）の 2 倍化暦→1 倍化暦（2 年を 1 年に変更）で仮計算すると、5 朔→9 朔に計算され、昨今の不知火が現れる 8 朔と 1 ヶ月の違いはあるが、昨今の不知火の現れる日に近い暦日が計算された。そのため、更に研究した。

結論

日本書紀暦、アスス暦の暦日は、天皇の年齢、在位年数を近隣諸国の暦と比較すると長大である。また、アスス暦にも不知火が現れた月日を5朔としているが、昨今は8朔である。また、ヤマトタケの生まれた時の妊み月は10ヶ月でなく21ヶ月である。また、春の記述は、日本書紀では毎年1～3月に記述されているが、アスス暦では奇数年の1～3月のみであり、偶数年の1～3月には季節の記述がない。このことを踏まえて、旧暦と新暦の換算表を借用し、旧暦→新暦→2倍化暦→1倍化暦→旧暦へと5朔を換算し8朔の可否を検証した結果、景行天皇18年（西暦89年）の5朔は西暦243年の7月27日（4日違い）が再現した。また、西暦88年、89年の5月21日（5朔）の月の満ち欠けを調べたが、5朔は新月でなかった。それに対し、西暦243年の7月27日の月令は25日に計算され、深夜1時39分の月の出までの間に不知火は見られたようだ。この結果より日本書紀暦、アスス暦の紀年は、虚像の2倍化暦であった。

昨今と違う五月朔・初日の不知火の記述

（1）日本書紀

卷第七 大足彦忍代別天皇 景行天皇

《景行天皇一八年（戊子八八）五月壬辰朔》五月壬辰朔。從葦北発船到火国。於是日没也。夜冥不知著岸。遥視火光。天皇詔挾抄者曰。直指火処。因指火往之。即得著岸。天皇問其火光之処曰。何謂邑也。国人対曰。是八代県豊村。亦尋其火。是誰人之火也。然不得主。茲知非人火。故名其国曰火国。

（2）ホツマツタエ（安聰本_直訳文）

日代の代熊襲討つアヤ（綾） 38アヤ（綾）58、63～65

廿~~五~~廿~~五~~廿~~五~~廿~~五~~廿~~五~~

18年3月

.....(中略).....

△ 庚 ④ 壬 △	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	船馳せて	サ（5）月初日に
夙 田 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	日の暮れて	行く八代え
夙 田 △ 庚 ④ 壬	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	火の光る	着く岸知れず
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	勅り	所え指せとの
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	何村と	岸に上りて
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	トヨ村の	問えば八代
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	主お得ず	炊く火お問えば
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	知らぬ火の	人の火ならず
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	6月3日	国と名付くる
△ 庚 △ 庚 △ 庚 △ 庚	△ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛 △ 辛	船渡し	高来県の
			タマガナ村の

過去のアスス暦の分析結果

ホツマツタエを中心に、日本古代史の年代に関する事象を調査、研究結果を分類すると、(1) ホツマツタエと日本書紀らの両書に記述がある事象のもの、(2) 両書の記述内容が一部違う事象のもの、(3) 両書の記述が独立し比較できない事象のものに分類される。

その事象を具体的に述べると、不知火の現れる日の違いは(1) 項、春の記述の偏りなどは(2) 項になり、ヤマトタケを妊まれた月数の違いはホツマツタエのみに記述されるため(3) 項になる。また、天皇の年齢、在位年数は、(1) 項になる。

そして、この(1)(2)(3) 項の内容を比較し易いようにまとめたのが、次の、「表 アスス暦の古古代暦、日本書紀暦と自然科学の比較」になる。ご覧下さい。

表 アスス暦の古古代暦、日本書紀暦と自然科学の比較

比較暦名	アスス暦の古古代暦	日本書紀	自然科学
(1) 一日を表す単位	古暦の一日	未記述	24時間
(1) 不知火の現れる日(旧暦)	5朔	5朔	8朔
(1) 百歳以上の天皇(12人中)	8人中5人	7人中5人	0人
(2) 春の記述年	奇数年	全ての年	太陽暦の春
(3) ヤマトタケの生まれ月数	21ヶ月	未記述	10ヶ月10日
(3) 望(満月)の記述	11個所	未記述	朔望月の望
暦の検証	吉田解説暦	儀鳳暦	グレゴリー暦
遡り起点年	紀元399年	—	—

判定

この結果より、日本書紀暦、アスス暦は、一見正しいように見えるが、自然現象に適合しない暦法であった。なお、望を15日と見做し、上表の望(満月)11個の記述を天文学の月相プログラムで計算したが、約80%は望の180°付近にならなかった。ホツマの記述は、望と15日を分けており望は15日でなく、満月の意味を表していた。

(注記) スス暦、アスス暦の太陽暦が使用できる根拠

スス暦が自然科学と一致することは、1日の数え穂が「1日16穂」、また、「2日16穂」と判明したため、太陽暦が使用できることが判明した。また、アスス暦は本来太陰太陽暦であるが、アスス暦の暦日のエトを再現させるプログラムを作成すると、1年約385日と1年約265日の二つの暦法が作成される。この二つの暦法で19年間の平均日数を計算すると、太陽暦の1年の日数とほぼ同じ約365.2422日計算された。このため、2倍化暦→1倍化暦への変換には太陽暦の使用が可能となった。

自然科学、生理学より年代を糺した古代アスス暦の日本史年表

アスス暦の分析結果より、自然現象に準じた古代アスス暦の日本史年表を、新たに再現させたのが、次の「古代日本史年表」になる。また、作成手順も次に記述した。

古代日本史年表 (BC 2世紀～AC 3世紀)

	アスス暦	遡り年	アスス暦のできごと
1	21穂 (初年)	前151年頃	スス暦よりアスス暦に改暦される
2	58穂	前133年頃	タケヒト (神武) の天日嗣 (初代天皇)
3	208穂	前 58年頃	ヨシヒト (懿徳) の天日嗣 (四代天皇)
4	504穂	92年頃	モトギネ (孝元) の天日嗣 (八代天皇)
5	678穂	179年頃	われは韓国 王の王子ツノガアラヒト 帰るアラヒト 任那国 これ建ち初ぞ
6	720穂	200年頃	今より後は はじもの (土師物・埴輪) お 生けるに代えて 御陵に 植えて例しと なすべしや
7	788穂	234年頃	タリヒコ (景行) の天日嗣 (十二代天皇)
8	789輪	235年頃	若宮の 初暦なる
9	806穂	243年頃	タリヒコ (景行18年) 筑紫巡行の折、八代海の五月朔・初日に不知火が現れる←八朔の不知火
10	843穂	262年頃	ホツマツタエの終焉
	この間、	省略した。	
11	1117穂 (注)	399年	仁徳天皇の薨御年 (履中天皇元年)

(注記) 1117年は、履中天皇元年をアスス暦に換算したもの。

(1) アスス暦の2倍化暦→1倍化暦への換算方法

アスス暦は、太陰太陽暦である。だが、太陰太陽暦の1年の日数は、毎年変化し最大30日まで変わる。そのため、単純に暦日、経過日数を2倍化暦→1倍化暦(2分の1)にできない。その代わり2倍化暦→1倍化暦(2分の1)への変換は、1年の日数が安定している太陽暦(前頁の注記参照)を使用することにした。

- 手順として、アスス暦→西暦遡り年(2倍化暦→1倍化暦)への変換方法を述べると、
- ・まず、アスス暦の年月日の経過日数を太陽暦で計算する。
 - ・次に、スス暦の1日である「16穂」からニニキネの御世に「2日で16穂」に改暦されている。そのため、元の1倍化暦に戻すため、16穂を32穂で割り算した値で、1倍化暦の経過日数を太陽暦で計算する。
 - ・そして、経過日数を1年の日数、1ヶ月の日数より、1倍化暦の年月日を算出する。

(2) 遡り年の起点の算定方法

ホツマツタエは12代の天皇で終了している。それ以降は、日本書紀を参考にし、この間の各天皇の元年をアスス暦に換算した。その結果、次の通りとなる。

13代	成務天皇元年・アスス	848年（御世60年）	+1年空白
14代	仲哀天皇元年・アスス	908年（御世9年）	
15代	神功皇后元年・アスス	918年（御世69年）	
16代	応神天皇元年・アスス	987年（御世41年）	+2年空白
17代	仁徳天皇元年・アスス	1028年（御世87年）	
18代	履中天皇元年・アスス	1117年（御世6年）	紀元399年
19代	反正天皇元年・アスス	1123年（御世5年）	+1年空白
20代	充恭天皇元年・アスス	1128年（御世42年）	

そこで、天皇の年齢が長大化している天皇を捜すと、神武～17代・仁徳天皇までに限られていた。そのため、次の18代履中天皇の元年の399年を遡り年の起点とした。

自然科学に対応した不知火の現れる日の計算

アスス暦で、景行18年5月朔・初日の不知火が現れた時の暦は太陰太陽暦である。この景行18年を西暦に換算すると一般的には西暦88年となる。だが、ホツマツタエには景行18年をアスス暦に置き換えた時の年代がない。そこで、暦日を計算すると、前天皇の垂仁天皇が薨御され景行天皇の天日嗣（アスス788年7月11日）～翌年春の初年（アスス789年）までは「喪に服す」期間が存在していた。

そのため、景行天皇の18年はアスス805年→806年の西暦88年→89年になる。だが、西暦89年が、日本の古代暦で何年になるかの新旧対照年表がなかった。そのため、西暦89年と自然科学を直接に対比することができなかった。また、暦は、暦日の繰り返しである習性が判明しているため、日本に新旧暦の対照表が存在する西暦594年以降の対照表を借用し、勘弁的に西暦89年の不知火の現れる5朔（旧暦）を、昨今の不知火の8朔（旧暦）に置き換えが可能か推測してみた。

1、変換の対比手順

(1) 旧暦→新暦への変換、景行天皇18年5月朔

まず、対照表の西暦594年～西暦693年を借用し、旧暦、景行天皇18年5月朔・初日を新暦時の月日に換算した。その結果、旧暦の5月朔は、新暦で5月21日～6月19日までバラ付いていた。

借用・旧暦 → 新暦に換算		
NO,	景行天皇18年(西暦89年)	西暦594年~西暦693年
1	5月朔	5月21日
		~
2	↑	5月31日
3	↑	6月1日
		~
4	↑	6月19日

(2) 新暦5月21日~6月19日(2倍化暦) → 1倍化暦の月日への換算
 2倍化暦→1倍化暦への変換は、太陽暦の1年の日数、1ヶ月の日数を利用した。

借用・新暦 2倍化暦→1倍化暦への変換		
NO,	西暦89年(アスス暦806年)	西暦243年
1	5月21日	9月11日
	~	~
2	5月31日	9月16日
3	6月1日	9月16日
	~	~
4	6月19日	9月25日

(3) 新暦9月11日~9月16日(1倍化暦) → 旧暦に換算
 新暦の9月11日~9月25日は、7月24日~8月24日までバラ付いていた。

借用・新暦1倍化暦 → 借用・旧暦1倍化暦への変換		
NO,	西暦243年	西暦594年~西暦693年(景行18年)
1	9月11日	7月24日(八朔の6日前)
	~	~
2	9月16日	7月25日(同上)
3	9月16日	8月10日(八朔の10日後)
	~	~
4	9月25日	8月24日(同上)

(4) 上記の借用・西暦594年～西暦693年での計算結果(まとめ)

西暦594年～西暦693年を借用し、アスス暦の5朔を旧暦→新暦(2倍化暦)→新暦(1倍化暦)→旧暦の順で換算した結果、5朔は旧暦の7月24日～7月25日、8月10日～8月24日に計算された。だが、昨今の不知火が現れる日は旧暦八朔と云われており、8月1日は再現しなかった。

NO,	旧暦→借用・新暦に 換算		借用・新暦 2倍化暦 → 1倍化暦への変換		借用・新暦1倍化暦 → 借用・旧暦1倍化暦への変換	
	景行天皇18年 西暦89年	西暦594年 ～西暦693年	西暦594年 ～西暦693年	西暦243年	西暦243年	西暦594年～西暦693年 (見なし年、景行18年)
1	5月朔	5月21日	5月21日	9月11日	9月11日	7月24日 (八朔の6日前)
		～	～	～	～	～
2	↑	5月31日	5月31日	9月16日	9月16日	7月25日 (同上)
3	↑	6月1日	6月1日	9月16日	9月16日	8月10日 (八朔の10日後)
		～	～	～	～	～
4	↑	6月19日	6月19日	9月25日	9月25日	8月24日 (同上)

そのため、更に、研究した。

2、旧暦8朔(8月1日)は、再現するか

(1) 借用・次の100年での西暦694年～西暦793年での再検証

前述の2、対比の手順と同様に5朔を換算するが、借用した次の100年は西暦694年～西暦793年で検証した。すると、8月1日に近づく日は、旧暦の5朔→換算後に7月24日～7月25日であることが判明していたため、7月24日より小さい日をピックアップした。その結果、779年5月21日において、2倍化→1倍化への変換後の9月11日、また、新暦→旧暦に換算後の7月27日に換算された。

更に、西暦794年～西暦1406年までを検証したが、8月1日に近づく日は、7月27日を超えなかった。下表は、7月27日を算出したその代表例である。

借用・西暦の月日より5朔→8月1日の近づく日の調査表

No.	借用・西暦	西暦	西暦・新暦	西暦・新暦	西暦
		旧暦	2倍化暦	1倍化暦	旧暦
1	779年	89年5朔	5月21日	243年9月11日	7月27日
2	912年	89年5朔	5月20日	243年9月10日	7月27日
3	988年	89年5朔	5月19日	243年9月10日	7月27日
4	1026年	89年5朔	5月19日	243年9月10日	7月27日
5	1045年	89年5朔	5月19日	243年9月10日	7月27日
6	1064年	89年5朔	5月19日	243年9月10日	7月27日

3、まとめ

自然科学に対応した不知火の現れる日は、借用・西暦の旧暦5朔を新暦の月日に換算し、次に、新暦のまま2倍化暦→1倍化暦の月日に換算し、最後に新暦から旧暦の月日に戻した結果、旧暦の5朔は旧暦の8朔にはならなかったが、一番近い月日は7月27日が計算された。このことから、4日の不足はあったが、不知火町の文献不知火を見ると不知火は一週間くらい見られると記述しており、この結果を踏まえると、ほぼ不知火が現れる範囲が再現したと思われる。

但し、平成27年を最後に不知火は現れてない。原因は不明だが、対岸の照明の影響、温暖化で夜昼の海水温差の減少などと云われている。(不知火町談)

自然科学に対応した天文学の月相計算プログラムによる新月検証

古天文学を設立された齊藤国治先生に出会ったのは、1996年6月中旬のことだった。先生は、東京天文台の教授を最後に1974年に退官され、八王子の自宅で古天文学の研究されていた。その関係で、「月の視位置」のベーシックプログラムを勉強させて頂いた。だが、それから約22年も経っており、新たにエクセル表に、昔のベーシックプログラムの計算式を代入し、古代の月相の計算プログラムを完成させた。また、プログラムの一部を下記に紹介した。

更に、プログラムの精度も紹介しましたのでご覧下さい。

160 Y 年

170 M 月

175 D 日

190 H 時間

200 LON 経度

204 LAT 緯度

220 S=INT(365.25*Y)+INT(30.59*(M-2))

230 H#=H/24

240 LON#=LON/360
 250 JD#=S#+D#+H#-LON#+1721086.5#
 260 T#=2299161#
 270 A=INT(Y/400)-INT(Y/100)+2
 290 JD#=JD#+A#
 中 略 (紙面の都合で省略しました。)
 1585 LAM2=LAM+LAM1
 1750 MP=LAM2-SL 月相 (注記) 月相と満ち欠けの角度
 1754 MP=MP+360 月相 新月時0°・360°、望時180°

古代の月相の計算プログラムの精度

先生の計算値との誤差は、次の通りである。

(1) 建武12年 AD. 36 III 31 20h 経度112.4 緯度34.8
 月相計算値 192.8 (先生の値192°34) 判定「ほぼOK」

(2) アモス書の日食の日

紀元前763 VI 15 11h 経度43.2 緯度36.5
 月相計算値 -0.25 (先生の値0°11) 判定「ほぼOK」

アスス暦、景行天皇18年5月朔・初日の月相の計算

不知火が現れる日は、新月であることは理解して頂いていると思うが、そこで、アスス暦の景行天皇18年を2倍化暦→1倍化暦、西暦に換算し、先の古代日本史年表にも記載したが、換算年は西暦243年になる。そこで、先に紹介した「古代の月相の計算プログラム」で不知火の現れる日の5月朔・初日の月相を計算し新月の可否を見ると、

(1) 景行天皇18年に現れた不知火時の月相

景行天皇18年、西暦89年5月1日(旧暦)は、新暦にて5月21日~24日になる。そこで、不知火町の23時55分 経度130.61 緯度32.63で不知火を見たとして計算すると、月相の計算値は、92.69(月令7.6日)~128.27(月令10.5日)となり新月でなかった。

なお、西暦88年5月1日(旧暦)も、新旧対照表を借用しているため、新暦にて5月21日~24日になる。月相の計算値は、152.09(月令12.5日)~185.1(月令15.2日)となり新月でなかった。(満月時の月相:180)

(2) 換算、景行天皇18年に現れた不知火時の月相

そこで、暦を2倍化暦 → 1倍化暦、西暦に変換し、不知火が現れた日を計算すると、景行天皇18(西暦89)年5月朔・初日は、243年9月11日(★旧暦7月27日)が、八朔に一番近い日になる。そして、他の条件は(1)項と同じで

月相を計算すると、月相計算値は★307.71（月令25.2日）となる。新月の夜ではないが、月の出は八代海の水俣で真夜中の1時39分と遅く、逆三日月の月であり、旧暦の8朔前後の一週間は不知火が見える日があると云われている。

なお、江戸、明治の不知火の記述6件を見ると、7月晦日が4回、8朔が1回、早秋末9日が1回の記述ありそれを裏付けるようである。

紀元243年の再現値（★印）

NO,	旧暦	新暦（西暦）	月相	月令	呼び名	旧暦	旧暦
1		243年9月10日	294.50	24.15		7月26日	
2		243年9月11日	★307.71	25.24		★7月27日	
3		243年9月12日	320.85	26.31		7月28日	
4		243年9月13日	333.86	27.83		7月29日	末9日
5		243年9月14日	346.67	28.43		7月30日	7月晦日
6	五朔	243年9月15日	357.52	29.32	新月	8月1日	八朔
7		243年9月16日	9.86	0.80	新月	8月2日	
8		243年9月17日	21.93	1.79		8月3日	

（注記）上表の★印は、今回の再現値を示す。

紀元243年前後の旧暦八朔と新月の関係

旧八朔が新月になるか、否かを紀元242年～243年の三年間について、調べて見た。その結果、紀元243年の旧八朔のみが新月になるようである。紀元242年、紀元243年の新月は、旧八朔前後に2～3日のズレとなっていた。

ピンク色は新月を示す

NO,	旧暦	新暦	紀元242年	紀元243年	紀元244年
1	7月26日	9月10日	338.015521	294.506682	260.056346
2	★7月27日	9月11日	351.374967	★307.714445	271.355860
3	7月28日	9月12日	365.029293	320.854130	282.458585
4	7月29日	9月13日	17.211693	333.864047	293.449892
5	7月30日	9月14日	31.259970	346.677902	304.409752
6	8月1日	9月15日	45.267041	357.528259	315.406627
7	8月2日	9月16日	59.098533	9.864634	326.493602
8	8月3日	9月17日	72.655759	21.931459	336.154356
9	8月4日	9月18日	85.883778	33.711213	347.445223
10	8月5日	9月19日	98.768310	45.213496	358.951321
11	8月6日	9月20日	111.325058	56.473098	10.673062

(注記) 上表の★印は、今回の再現値を示す。

(3) 結果の判定、

上記の(1)(2)項の天文学の月相から判断しても、景行天皇が見た時の景行天皇18年5朔の頃の暦は、天文学と一致しない。そして、2倍化暦を1倍化暦に是正したアスス806年(景行18年)→紀元243年への変換は、天文学上も遜色なく、旧暦の7月27日以降～八朔までは不知火が見えたことがわかって来る。

参考文献

- ・ ホツマツタエ (安聰本)、・ ほつまつたえ・上下 (鎭邦男編著)
- ・ 日本書紀 (武田祐吉校注、Web 朝日新聞社)、・ 古天文学 (齊藤国治著)
- ・ 日本書紀暦日原典 (内田正男著)、・ 古事記及び日本書紀の研究 (津田左右吉著)
- ・ 本居宣長全集 (筑摩書房) 第8巻の一部 (本居宣長記念館)
- ・ 上世年紀考 (那珂通世著、三品彰英補)、・ 日本王位一覽之一 (林鷲峰著)
- ・ ホツマ暦の解説書 素朴な疑問! 古代日本は、いつから始まったのか (自編)
- ・ 古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」古代自然科学に基づいた解説秘伝の書
- ・ 景行天皇 天つ日嗣、初暦と55年 (自編)
- ・ ホツマツタエは 日本書紀よりやはり古かった (自編)

(おわり)